慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	テアイテトス篇におけるソクラテスの産婆術と教育
Sub Title	Socratic midwifery in Theaetetus
Author	東, 敏徳(Azuma, Toshinori)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2010
Jtitle	哲學 No.124 (2010. 3) ,p.139- 156
JaLC DOI	
Abstract	Theaetetus is an acknowledged masterpiece of Plato. It offers a positive dialogue of Socratic method, and it substantiates the efectiveness of Socratic midwifery (maieutic) strategy for the education. The first rule of educational midwifery is not to hand the right answer to one's interlocutors, but to enable them themselves to give birth to the right answer from their own inner resources. In this article, I will show that Socratic conversation with Theaetetus makes clear the structural framework of his method. In the first part of this article, I will concentrate on the position of Theaetetus in the Plato's works. Theaetetus is written in a spitit of open-minded inquiry which is typcally Socratic in the early dialogue, without at any point presupposing Plato's characteristic middle-period doctrines. In the second part, I will analyze the theme of Theaetetus about knowledges. Socrates' way of labelling the word 'know' as a potentiality word is to link it to 'possessing' something as opposed to 'having' it. In the third part, I will conclude that the metaphor of aviary is the foundation of midwifery method.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000124-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

テアイテトス篇における ソクラテスの産婆術と教育

東　　敏　　徳*

Socratic Midwifery in *Theaetetus*

Toshinori Azuma

Theaetetus is an acknowledged masterpiece of Plato. It offers a positive dialogue of Socratic method, and it substantiates the efectiveness of Socratic midwifery (maieutic) strategy for the education. The first rule of educational midwifery is not to hand the right answer to one's interlocutors, but to enable them themselves to give birth to the right answer from their own inner resources.

In this article, I will show that Socratic conversation with Theaetetus makes clear the structural framework of his method. In the first part of this article, I will concentrate on the position of *Theaetetus* in the Plato's works. *Theaetetus* is written in a spitit of open-minded inquiry which is typcally Socratic in the early dialogue, without at any point presupposing Plato's characteristic middle-period doctrines. In the second part, I will analyze the theme of *Theaetetus* about knowledges. Socrates' way of labelling the word 'know' as a potentiality word is to link it to 'possessing' something as opposed to 'having' it. In the third part, I will conclude that the metaphor of aviary is the foundation of midwifery method.

* 聖徳大学幼児教育専門学校，慶應義塾大学文学部（非常勤講師）

1. テアイテトス篇の位置づけ

テアイテトス篇がプラトンの作品集の中でどの様な位置づけができるかという問題は多く議論されている[1)].

テアイテトス篇の対話形式は初期対話篇の特徴を典型的に有している．その特徴はプラトンの初期対話篇に共通する要素，ソクラテス自身の無知の告白，吟味の対象となる命題群の提示と対話を通しての検証，最後は双方共に自分たち自身が不十分な知識しか持っていなかったという同意の確認，というプラトンの初期作品集に典型的な共通の筋書きである．

しかし同時にテアイテトス篇は中後期作品群の時期に書かれている．テアイテトス篇の中でコリントス戦争が言及されているところから，プラトンが六十代以降になって書かれたものと推定されている[2)]．プラトンの六十代は，国家篇やパイドン篇などの著作を通して，プラトン自身が自分の思索を提示していく時期である．テアイテトス篇をプラトンが纏めたのは，プラトンの円熟期であり，イデア論を中心とする思想を解説していく時期に当たる．テアイテトス篇は初期作品群に共通するソクラテスの活動に典型的な特徴を示しながら，その著述された時期はプラトンがソクラテスとは異なる思想展開を確立していく時期になる．

テアイテトス篇が位置づけられる中期プラトン作品群は，イデア論に基づく，プラトンの中心的枠組みと言える想起説の展開が特徴的である[3)]．プラトンの中後期作品群で徐々にソクラテスの姿が薄れていくことを考えると，中，後期作品群はソクラテスの思想的残滓を整理して，プラトンが自説を確立していく過程であると捉えられている．その中で，逆にテアイテトス篇はソクラテスの方法をなぞっていくという筋書きを持っている．

ではなぜ，そもそもプラトンはその円熟期とも言える時期に，言い換えれば，師ソクラテスから訣別し思想的に独立していく時期に，プラトン自身の著作活動の原点と言える，師ソクラテスの方法，アポリアで最後を終

わるというスタイルに回帰してこのテアイテトス篇を纏めたのであろうか.

ここからテアイテトス篇をプラトンの作品群の中で過渡的な作品であると見る見方，その意味で補完的な作品として見る解釈が成立する[4]．しかし，上の解釈に対し，本稿では教育学的視点から見ることでテアイテトス篇を，ソクラテスの教育方法を端的に示す作品として見る解釈を提示する．すなわち，テアイテトス篇をソクラテスの産婆術という教育方法の本質を浮かび上がらせている作品として位置づける[5].

テアイテトス篇は，国家篇などが著述された時期に重なることから，プラトンが自分自身の思想を形成していく上で，ソクラテスの実践的特徴を意識的に明示していかなければならないという自覚を必然的に持った時期に完成されている．国家篇はプラトンがその時点における理論構成を直接に表明したものと位置づけられる．それに対し，テアイテトス篇は初期対話篇に示されたソクラテスの活動をプラトンが対比的に整理した作品として位置づけられるものとして捉える.

このような位置づけを行うことは，ソクラテスの知識論とプラトンのそれとの差異づけを示すことにもなる．産婆術についての教育学的解釈は従来，ソクラテスが，エロス的存在として人間を捉える人間観に立脚している解釈し，そのエロス的な働きを喚起し，善いものを産み出す中に教育が成立すると位置づけられた[6].

しかし，テアイテトス篇での産婆術は，一つ一つの主張が吟味され，その論拠を確認していき，続いて別の候補が提出され，それも吟味されていくという過程を積み重ねて行われる．その際に，演繹されてくる命題の妥当性，比較，類比，などを通じて，主張の妥当性が確認されていく．この吟味は考察の俎上にあげるところまでで終わり，それ以上には敢えて進まない．それぞれの主張は結果として，自己矛盾に陥り，主張していた当人がソクラテスとの対話で自分の主張が行き詰まり，言葉に詰まるという袋

小路，アポリアに追い込まれる．言い換えれば，結論の保留に留まることになる．すなわち，そこから先は対話に参加している当事者，そして対話篇を読んでいる読者に委ねられる．それは産婆術をエロス的な働きを育て生産することτοκοϛとして捉える立場では，なにも生産しないままで放置された状態に留められることとなる．

テアイテトス篇の読者もまた同時に，ソクラテスと交わされた吟味がいずれも結論に到達するという意味では不首尾に終わっていることを認めることになる．結論に到達できない以上，主張は不完全であるという確認に読者は導かれる．しかし，結論に到達できないとしたら，何が結果として残るのか．助産の結果が，体系的知識という形を取るものとする限り，結論に到達できないという結果は助産の不成功となる．

産婆術とはむしろ，自己吟味への援助であり，正解としての結論へと導く過程の援助ではない．知識を産出することが産婆術ではなく，変化する世界の中で自分の論拠を問い直す契機を与え，自分に向かい合い，自分を問い直ししていくことが産婆術である．そこでは知識は知識として成立する条件を満たしているかどうか，またその条件そのものが妥当であるか吟味を受けることになる．

しかし，その問い直しは，既存の知識に対する挑戦として受け取られ，ソクラテスへの死刑判決へと繋がった．それを目にしたプラトンは問い直しの過程よりも，イデア説という理論的一貫性を持つ理論を展開する方に力を注ぐことになる．その必然性を示すために，プラトンはテアイテトス篇を纏めていく．それは反面，ソクラテスの産婆術という教育方法との対比を確認する作業に直結していく．

2.　テアイテトス篇の構成

テアイテトス篇の始まりはプラトンの対話篇の特徴通り，対話の行われる舞台設定から始まる．しかし他の対話編と異なるところは，その内容が

ソクラテス自身の思想であることの執拗なまでの強調である．

それはテアイテトス篇の巻頭における次の記述に示される．まず，ソクラテスの弟子の一人とされているエウクレイデスが，問答の一部始終をソクラテスから聞いて筆記したものであると確認している．さらに，対話相手であるテアイテトスとソクラテスが語った内容の記録が間違いのないことを直接ソクラテスに確かめることで，エウクレイデスはソクラテスの対話を精確に書き留めることができたと断言する．すなわち，テアイテトス篇はソクラテスの校閲を経たものであると言い切っている「覚えの不確実なところをソクラテスに尋ねて，さらにまた校正するようにした *ἐπανηρώτων τὸν Σωκράτη ὅ μὴ ἐμεμνήμην καὶ δεῦρο ἐλθὼν ἐπηνορθούμην* (143A)」．テアイテトス篇はソクラテス自身の純粋な言葉であり，プラトンの考えは混在していないという強調である．すなわち，プラトンが残したものであるにしても，ソクラテス当人の主張として，信憑性も純粋度も高いことを強く示そうとしている[7]．

テアイテトス篇の主要なテーマは知識とは何かを中心に展開されている．しかも初期対話篇の定型通り，知識の定義に辿り着けなかったという否定的な結末で終わっている．（この点は，知識の定義を説明する国家篇では明確な結論が出ているのに対し，執筆の完成時期が重なるテアイテトス篇と国家篇では結末としての終わり方が異なっており，対極的な位置関係にある．）

テアイテトス篇は知識を定義していく論証の段階に基づいて，三つの部分に区分できる[8]．一つは感覚としての知識のあり方について吟味されている部分である．ここでは，知っているという言葉が使われる際には，知っている当の対象を色，音として感覚すれば，知っていると言えるとする立場が吟味される．「知識は感覚である *ἔστιν ἐπιστήμη ἥ αἴσθησις* (151E)」．しかし，感覚だけでは，音や色やさわり心地は捉えられるが，その刺激が無くなると消失する．そのため，色があり，音があるという理解はすぐに

は捉えられないと反論される．すなわち，感覚は刺激を受けた時にのみ生じるのであり，刺激が無くなると同時に失われるのであるから，知識という保存状態には直接すぐには結びつかないと指摘される．また，感覚だけでは，それぞれの人に相対化された仕方で知り様が存在することになり，万人にとって知られているという知識の成立は保証されない．「人間が万物の尺度ということは，人が知者でないならば，認められない *καὶ οὔπω συγχωροῦμεν αὐτῷ πάντ'ἄνδρα πάντων χρημάτων μέτρον εἶναι, ἄν μὴ φρόνιμός τις ᾖ* (183B)」．この一つ目の主張への反駁は，プロタゴラスの主張である，人間が万物の尺度であるとする考え方への反駁でもある．

次には，思いなしとしての知識が候補に登場する．私たちは色や音があるということ，色の違いや音の違いも客観的な悟性的判断として認定できること，さらに数についても考えることができることから，感覚対象について思いなす悟性としての知識のあり方が提示される．

しかし，この第二の主張は真なる知識の候補としては次のように退けられる．まず，私たち自身が自分の思うことが全て正しいと言えないという事実を知っている．思い違いや誤った解釈をするなどの事例を知っている．さらに，間接的な知り方もある．例えば裁判官は証言や弁護など幾つかの証拠や弁論から，自分の直接経験に基づいた知識によらず判断する場合がある．「裁判官はそれらの事項をただ聴取によってのみ把握した上で判断をしていくわけだが，その場合，説得に基づいて判断していることになる *ταῦτα τότε ἐξ ἀκοῆς κρίνοντες ἀληθῆ δόξαν λαβόντες, ἄνευ ἐπιστήμης ἔκριναν* (201B-C)」．すなわち，感覚対象の直接的な認識と異なり，知識の関連を問うことで，真偽の判断が可能な知識がある．これは，正しい思いなしと，虚偽の思いなしとをどう区別するかという問いに繋がる．

そこで第三の主張は次のようになる．正しい思いなしにロゴスを加えることが正しく知っているという状態の成立条件であるという主張である．「知識は真なる思いなしに言論が付け加わってできる．そして真なる思い

なしだけでは，言論が加わっていないと，知識の範囲には属さない *δὲ τὴν μὲν μετὰ λόγου ἀληθῆ δόξαν ἐπιστήμην εἶναι, τὴν δὲ ἄλογον ἐκτὸς ἐπιστήμης* (201C-D)」.

しかし，単に理由を口にするだけでは，その理由を知っているという保証にはならない．正しく知っているという状態は安易に蛇足でしかない理由をこじつけるだけでは不十分であり，理由の正当性を説明することなしでは得られないとされる．最終的に「知識であるのはテアイテトスよ，君の言う感覚でもなければ，真なる思いなしでもなく，そうかといって，また真なる思いなしに言論の加わってできるものでもない *οὔτε ἄρα αἴσθησις, ὦ Θεαίτητε, οὔτε δόξα ἀληθὴς οὔτε μετ' ἀληθοῦς δόξης λόγος προσγιγνόμενος ἐπιστήμη ἂν εἴη* (210A-B)」という結論が導かれる．

結果として，知識についての三つの定義はどれもアポリアに行き着く．この結果をもとに，なぜ正しい知識が得られない状況が生じるのか，間違った判断をなぜ私たちがしてしまうのかという問いが立てられる．ソクラテスはその説明のため，知識についての比喩を導入する．その一つは印形モデル (191A-196C) であり，次のように説明される．

知識は，鑞でできた板に喩えられた私たちの心に刻印された形跡であり，感覚から受け止めた刺激を，この鑞板に宛い，写し取ることから生じる．「それは指輪についている印形を押しつける時のようなものだ *ὥσπερ δακτυλίων σημεῖα ἐνσημαινομένους* (191D)」．刻印の形が保持されている限り，知識として記憶することができるが，形が崩れたり，ぬぐい去られたものは形が不確かになり，跡がなくなることで忘却されていく．このような心の印形モデルにより，間違った判断の発生をソクラテスは説明する．

しかし，このモデルでは感覚的な間違いについてのみ説明可能である．確かに，他者の容貌でも，私たちは親しい人について間違うことはない．それは刻印がはっきりしているからである．しかし，さほど親しくない人

については勘違いすることがある．これは刻印が不鮮明であるからである．ましてや「虚偽の思いなし *ψευδῆ δόξαν* (195C)」，例えば，数学の計算を間違える場合や，正義や勇気などについての混乱した思いなしの場合，印形モデルでは説明不可能な部分が生じる．ある人が正義の人であるかどうか，ある人が勇敢であるかどうかは感覚で得られた印形と照合することだけでは得られないとソクラテスはする[9]．

とくに判断に関わることがらをソクラテスは，内的言語の世界で起こると考えていた．印形モデルでは，感覚を通じた外界との照合で判断の正誤を考えるため，内的言語の段階で生じた問題については処理できない．自分の思っていることが正しいことであるかどうかについては外的世界で生じている事象との照合だけでは真偽を確定し得ない．四輪車として事物を確実に捉えるためには，四輪車の知覚的特徴をイメージとして持つことだけでなく，それに加えて，「四輪車とは何かと問われて，車輪，車軸，車較（車箱），車えんなどの部分の名前を挙げて答えることができたら，それがすばらしいとする *ἀγαπῷμεν ἄν ἐρωτηθεντες ὅ τί ἐστιν ἅμαξα εἰ ἔχοιμεν εἰπεῖν τροχοι, ἄξων, ὑπερτερία, ἄντυγες, ζυγόν* (207 A)」．すなわち，定義された知識が求められる．この定義された知識の正しさを他者と共有し，確認していくため，ソクラテスはさらに鳥小屋モデルを提示する．

ソクラテスはテアイテトスに，知識という鳥を集めた鳥小屋として心を考えようと提案する．「それぞれの心にいわば鳥小屋を作るとしようではないか *νῦν αὖ ἐν ἑκάστῃ ψυχῇ ποιήσωμεν περιστερεῶνά* (197D)」．この知識という鳥を私たちはさまざまな状況で多様な仕方で集めて，心の中に入れていく．

ソクラテスにとり，知識とはただ単に捕獲され保持されるだけでなく，それを応用できる形で能動的に把握しているという意味を含めて用いられる．それはちょうど一度捕まえた鳥を鳥かごの中に入れ，必要な時にはい

つでも，それを取りだして示すことができなくてはならない状態として比喩的に喩えられる．言い換えると，単に所有しているだけでなく，それを自由自在に適時に使いこなすことができるレベルまで含まれる．しかし，知識が十分に整理確立されて理解されていないと，間違いが生じる．例えば，鳥小屋の中から燕を捕まえて取りだしたつもりが，雀だったというような時，間違いが生じる[10]．「例えば，普通の鳩に代わりにモリバトを捕まえるようなものである *λαβὼν τὴν εν ἑαυτῷ οἷον φάτταν ἀντὶ περιστερᾶς* (199B)」．

この鳥小屋モデルの利点は先の印形モデルでは説明できなかった不十分さを補う点である．私たちの誤りはただ単に感覚的原因に由来するだけでなく，概念間の混乱や未整理に由来することに鳥小屋モデルは触れていく．

この鳥小屋モデルが示唆するもう一つの点は，中に「さまざまな種類の鳥が入れられ，自分たちだけで大群を為しているもの，小群を為しているもの，単独で他の鳥の間を飛び回っている類のものなど *τινα παντοδαπῶν ὀρνίθων τὰς μὲν κατ᾽ ἀγέλας οὔσας χωρὶς τῶν ἄλλων* (197D)」がいて，多様な分類が可能である点である．群れ同士の違いがまず存在する．それと同時に，群れの中の個体間にも差異がある．この多層的な違いを明らかにすることがソクラテスの対話篇の中で大きな役割を持っていた．徳とは何かを吟味するメノン篇では，勇気，勤勉などの道徳性が個々の事例に照らして相互にどう違うかを明示し，その妥当性が吟味された．ゴルギアス篇で，徳は教えられるかどうかを吟味する対話も同様である．ここでは知識はその妥当性を吟味され分類されていく．その結果が漸進的に知識の整理へと繋がっていく[11]．

さらに，新しい知見が加わる時，すなわち鳥小屋の中に新しい知識を加えていく時，再構成が生じる．今までよい生き方だと思っていたものが，時代の変化と共に多様になってくる．物質的な生活が満たされた時，貧窮

の時代なら間に合っていた豊かさの概念も物質的豊かさが充足される時代では変化していく．その時，鳥かごの中に蓄えてあった知識を再び取りだし，その確かさを改めて吟味しなくてはならない．この過程は状況が変化する以上，無限に続く吟味の過程となる．（もちろんこのような過程は無限遡行であり，プラトンはこの無限遡行を止めるため，イデア論に進んだ．）

この鳥小屋モデルは，私たちの知識は幼児期には空いていた鳥小屋の中に知識という鳥を納め始めるようなものであると考える．「人が幼い時には籠は空であるといわねばならないが，鳥を知識と置き換えて考えてみよう…知識しているとはこのことなのだ *Παίδιων μὲν ὄντων φάναι χρὴ εἶναι τοῦτο τὸ ἀγγεῖον κενόν, ἀντί δὲ τῶν ὀρνίθων ἐπιστήμας νοῆσαι…το ἐπίστασθαι τοῦτ᾽ εἶναι* (197E)」.

産婆術は，この鳥小屋モデルと組み合わせると，幼児期から鳥小屋の中に納め貯えてきたさまざまな種類の鳥を分類し，それぞれの特徴と類似性を吟味して，整理していく仕事として位置づけることができる．それは人々が成長と共に獲得してきた知識を整理し，世間でも通有するような普遍性を持つかどうか吟味する仕事である．喩えれば，思想的胎児を導きだし，出産前の胎内で保護されていた状況から外界での厳しい環境の中でも十分に通用していくかどうか，吟味を通じて手ほどきしていく過程である．「さてそれなら，知識を鳥の捕獲や所有になぞらえながらこう主張することができる．…このことは人が学んでその知識を既に以前から自分の物としていた，すなわち自分の知識にも当て嵌まるものであって，もう一度この同じものを学び返すのである．それはちょうど知識を前から所有していたものの，ただちに応用理解できるような形で所持していなかったものを，改めて理解し応用できるようにする学びの場なのである *Οὐκοῦν ἡμεῖς ἀπεικάζοντες τῇ τῶν περιστερῶν κτήσει τε καί θήρᾳ ἐροῦμεν…ἔστι καταμανθάνειν ταὐτα ταῦτα ἀναλαμβάνοντα τὴν ἐπιστήμην ἑκάστου καὶ*

ἴσχοντα, ἥν ἐκέκτητο μὲν πάλαι, πρόχειρον δ'οὐκ εἶχε τῇ διανοίᾳ (198 C-D).」

ここでソクラテスが産婆術という方法を学びの場と考えていたこと，また学びという言葉をマンサネインとカタマンサネイン，認識とメタ認識という二つのかたちで使っていることに留意しなくてはならない．ソクラテスにとり知っているかどうかの吟味は鳥小屋の中で飛び交う鳥を整理し，正しく区別し，呼び方を間違っていないか，日々の生活で必要となる際に，適切に取りだしてきているかどうか，知識の吟味というメタ認識である．当然，鳥小屋は一つ一つ違う．その中に飛び交っている鳥たちの種類も数も違う．その中で飛び交っている鳥を一つ一つ，他の人の思想という鳥小屋と比べ確認する．この吟味の中で優劣は最初から定まっているわけではない．それだけにこの鳥小屋の比喩は知っていることについての自分自身の厳しい自己吟味を必然的に包含していくことになる．道徳的知識についてなら，なぜそれが行われるに値する行為として選択されるのか，その理由の妥当性をどの様に立証していくのかという吟味となる．（ここに，知っているということが単に知識の想起であるという考え方と異なるところがある．）

そしてここには自分についての知識も含まれてくる．幼児期から子どもは自我像を構成していく．そこには自分のするべきこと，自分の役割などから，周囲との間でどの様に振る舞えばいいか，また自分はどの様に捉えられているかという認識が含まれる．この認識も自分についての知識として鳥小屋に収められ貯えられている知識である以上，吟味の対象となる．

3.　産婆術の意義

テアイテトス篇の148Eから151Dまでで，ソクラテスは知っているということをどの様に定義するかについての議論を通じて，テアイテトスをアポリアに導いていった．このような過程を，ソクラテスは自分の母，

ファイナレテの仕事に準えて産婆術という言い方で呼んでいる．その仕事は若い人々が知的な活動に際し，円滑に自分の意見を纏めて，普遍的な妥当性を持つように思想形成していく手ほどきをする仕事として説明される．産婆役が出産という重要な節目に立ち会い，円滑に出産が進むよう手助けするという仕事に比べられる．もちろん産婆役が出産後も母子の回復と成育を手ほどきしていくように，形成された思想の整理，吟味にも続けて携わっていくことになる．

この点を鳥小屋モデルと対比すると，ソクラテスの産婆術の意味が明白になる．産婆術とはそれぞれの人が持つ心の中の鳥小屋を比べ，鳥小屋から一羽ずつ取りだして見比べて整理してまた鳥小屋に戻すというような，自分の知識を一つずつ取り出し，他者の知識と比較し，その整合性を確認し，再び自分の鳥小屋に戻す，すなわち，思考の中に位置づけていくという過程なのである．

産婆術という方法はその理論的な根拠として，弁明篇の「知らないことを知らないと思う *ὅτι ἃ μὴ οἶδα οὐδὲ ὄιομοι εἰδέναι* (21D)」というソクラテスの主張に基づく．もとより，この主張はソクラテスの自分に対する他の言及，「私は自分が大にも小にも，知恵のあるものなんかではないのだということを自覚している *ἐγὼ γὰρ δὴ οὔτε μέγα ὄυτε σμικρὸν ξύνοιδα ἐμαυτῷ σοφὸς ὤν* (21B)」と述べるところを代表として，随所で語られている．

この自覚がソクラテスを産婆術へと向かわせる．自分が知恵があると思ってしまったその時点で，知恵への探求は停止する．自分の鳥小屋が完成されたものであり，最も優れたものであると考えること，すなわち，知恵があると思うのは，人間存在が未熟であることの忘却に繋がる．産婆術は自分を含め，人間として持つことのできる能力の限界を明るみに出すことである．

このため，道具立てとして産婆術では，定義，アポリア，反駁，論証，

論拠の吟味などが使われる．これは，現象の精確な記述，理論内部における整合性，他の確認されている理論との統合性，公共に受け入れられる合意，などと同様に，自分の提示した考え方の反証可能性を受け入れる自分自身への厳密な態度などにも対応する[12)]．

しかし，ソクラテスは産婆術の方法的限定も踏まえていた．それは三点の限定として求められる．まず一つに，ソクラテスは全ての相手を産婆術の対象としていたわけではない．未だに何かを孕んでいないものは除かれるし，単に知識を増やすことしか考えていないものについては他の教師，ソフィストのところへ行くよう奨めている (151B)．二つ目に，知的出産の可能性があるとしても，途中で断念したり，あるいは誤ったままで放置してしまったり，出産後の養育拒否をしたりする場合もある (150E)．三つ目に，自分で自分自身から多くの見事な知的出産を成し遂げていく例もある (150D)[13)]．

ソクラテスが対話篇の中で最後に語る言葉，吟味を通じて，自分の知らなかったことを知っていると思ったりしないだけの思慮深さを持ち「産を助ける *μαιειαν* (210C)」ことが自分のやるべきことなのだというまとめは，知的出産の特徴を示している．知的出産は完成品を生むわけではない．むしろ新生児が，周囲からの多くの適切な世話や配慮がなければ生存も危ぶまれるような状況に置かれているように，知的出産の後の世話や配慮が不適切ならば，偏った見方や，独善的な見解，衆愚政治に傾きやすい迎合性という危うさを持つ．乳児の養育や幼児の教育のように成長の過程での十分な世話が必要なのである．それは知識の吟味という世話であり，未だに自分が学び続けている過程にあることを自覚していく，自己に対する関わり方なのである．

知識の増加は知っていることを増やすだけではない．なぜそうか，本当にそうかという問い続ける姿勢を持つ限り，その増加した知っていることを整理し，吟味するプロセスは続く．むしろ増加した知識はその正当性を

確保するために，さらに知らなければならないことを増やしていく．そして知らなければならないことを既に知識として持っているとは限らない．今日の例をあげるなら，宇宙についての基本的知識が増えるほど，それを実証するために知らなければならないことは増えていく．

人間の能力が高まれば高まるほど，未来に対する決断は重要になる．その時，知らなければならないこと全てを知っていると言い切るのは傲慢に繋がる．ソクラテスの言う「知らないことを知らないと思う」「思慮深さ」を人々が踏まえること，そして思慮深さに導くこと，それをソクラテスは自らの実践とした．

乳児の養育や幼児の教育によく示されているように，子どもの成長を育むという働きかけを教育とするならば,，ソクラテスの産婆術はそれと同様に，自分や他の人の成長を育むという教育である．産婆術が知識の吟味への誘いであるならば，知識の吟味という教育活動への誘いでもある．

4. ま と め

産婆術という処置にかかると自己吟味を始めざるを得なくなる．自分の行いや自分の持つ考え方に対して，それを対象化し，常に正しいかどうか問い続けることになる．行動に際し，自分の選択した方向が正しいのかどうか，その理由は適切かどうか問い続けることになる．自説の説明に際し，科学に関するものであれ，政治経済に関するものであれ，日々の生活についてであれ，その論拠と妥当性を問い続けることになる．産婆術は自分が知らないことを知らないと確認することだけではない．「知らないことを知らないと思う」ためには，知らないことを知っていると思いこんでいるのではないかという問い続ける姿勢を求められる．自己吟味を続けること，これが自己に対してもまた他者に対しても産婆術という営みになる．ソクラテスは自分に対しても人に対しても，産婆となることを自分の仕事とした．

ここに教育哲学の源泉を見て取ることができる．ソクラテス以前のアテナイの教育である「どう教育するか」という問いの代わりに，「知っているとは何か」「知を習得するとは何を意味するのか」という自己吟味の求めという全く性質の異なった問いを掲げて教育をソクラテスは問うた．これは教育に関する問題そのものを自覚的に対象化し，その対象を客観的な吟味に曝し，正当性を確証する必要を提起したものである．

ここには教育活動を吟味する姿勢，すなわち，教育哲学という探求の姿勢が自覚的に出現している．言い換えれば，教育哲学は自分と人に対して吟味を行うところに，その出発点と存在意義を持っている．

註

1) プラトンの著作の成立年代を議論している例は多いが例として次の幾つかをあげる．Kahn, C. H., 'On Platonic Chronology', Anaas and Rowe (eds.), *New Perspective on Plato, Modern and Ancient*, (Cambridge, 2002). Young, C. M., 'Plato and Computer' dating', *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, 12, (1994).

2) 田中美知太郎他訳『プラトン全集 2』（岩波書店，1974）436 頁.

3) 田中さつき『テアイテトス研究』（知先書房，2007）序文 x 頁.

4) テアイテトス篇は三つの構成部分に分けられている．第一部（187a3 まで）は感覚としての知識の定義を巡って論議がされている．第二部（201c6 まで）は誤った思いなしについて正しい思いなしとの対比の中で語られていく．第三部では正しい思いなしと説明，ロゴスとしての知識が提案されるが，結尾は議論の結果が不首尾に終わったという初期対話篇にしばしば見られる特徴的な終わり方で締めくくられている．

   まずコンフォードは，この終わり方にソクラテスの思想的特徴が典型的に示されているとしてテアイテトス篇を捉える Conford, F. M., *Plato's Theory of Knowledge*, (London, 1935). 結論に到達できなかったという終わり方はプラトンが同時期に展開しているイデアを主張する時の終わり方とは異なるものである．

   この点はバーニェットの見解にも現れる．Burnyeat, M. F., 'Socratic Midwifery', *Bulletin of the Institute of Classical Studie*, 24 (1977), pp. 7–

16. バーニェットはテアイテトス篇には，知識を事物の総合的理解として考える立場が見られると指摘し，対象把握を言語使用の共同性から再構成している作品としてテアイテトス篇を解釈する．

またロングはテアイテトス篇がプラトンによるソクラテスの再評価であるという指摘をしている Long, A. A., 'Plato's Apology and Socrates in the Teaetetus', *Method in Ancient Philosophy*, Gantzler (ed.) (Oxford, 1998). この指摘はプラトン自身が自分のイデア的理論構成とソクラテスの理論的立場を意識的に対照した作品として捉える視点を提供する．すなわち，プラトンが自分自身の理論的構造を前提とした上でソクラテスの活動の意味付けを行っていると指摘する．

これらの指摘を踏まえ，プラトンのソクラテス対話編を読む時の注意として著者プラトンと話者ソクラテスとの関係については常に留意しなくてはならない．特に中後期の作品を読む場合にはその注意は重要となる．本論ではテアイテトス篇がプラトンによるソクラテスの再解釈であるという見方を取って論を進める．この解釈を取ることは，テアイテトス篇の特徴と著述の時期的位置づけの両方に適合する．

5) もとより，プラトンの著述の中で，ソクラテス自身の思想を浮き彫りにするという作業はプラトン作品群の多くがソクラテスの対話という形で綴られている以上，解釈の差異が伴うことは避けられない．しかし，初期対話編が具体的なソクラテスの行動と言動の記録として認められる以上，ソクラテスの思想をより留めやすく，ソクラテス固有の思想を反映しているとみなされるべきである．東敏徳「アルキビアデス 1 篇におけるソクラテスの産婆術と教育」『哲学，第 122 集』（三田哲学会，2009 年）．

6) 村井実『ソクラテス上』（講談社学術文庫，1977），163 頁．さらに，産婆術はエロス的な働きを助け，「美しいものの中で生産すること *τοκος*」（前掲書，166 頁）とされる．

また，上の位置づけから，テアイテトス篇ではプラトンはソクラテスとの距離をとっていると考えられる．プラトンは自分のメッセージを話者ソクラテスを通じて伝えていくという方法ではなく，ソクラテス的な考え方がプラトンのイデア論を前提としない限り，結論に達することができないという主張をテアイテトス篇で展開していると読みとるべきである Sedley, D., *The Midwifery of Platonism*, (Clarenden Press, 2004) p. 8.

7) この点はプラトンの舞台設定の巧妙さが示されているという指摘がある．前掲書『プラトン全集，2』，452 頁．ここで登場するエウクレイデスはパルメニデスやゼノンなどのエレア派の論理的分析手法を引き継いだメガラ派に属

すとされ，ソクラテスの対話の特徴の一つである論理的側面を引き継いでいる．この点で，プラトン自身の考え方とは異なるものであるという点を考えるならば，メガラ派の立場に対するプラトンの批判が含まれていると指摘されている．

この意図的な設定は，プラトン自身がソクラテスの特徴を意識的に示そうとしていると考えることもできる．ソクラテス自身の実践の意味とその実践を支える根拠を，ソクラテス自身が事実上自分自身の発言内容であると確定することによって，プラトンとの区切りをも示そうとしていると考えられる．この点からすれば，テアイテトス篇は，初期作品群の中で記録されたソクラテスの実践の総集編としての作品として着目できる．テアイテトス篇が中期作品群に位置づけられるとは言っても，中期作品以降に示されてくるプラトンの代弁者としてのソクラテスの位置づけとは異なるものとして見なければならない．

さらに，ブラストスの指摘のように，プラトンの初期対話篇のテーマは悉く道徳性に関するものであり，カルミデス篇のような知識を題材として対話が行われている場合でさえ，それは道徳的知識の可否についての論証である Vlastos, *Socrates; Ironist and Moral Philosopher* (Cambridge, 1991), pp. 47–8．これに対しテアイテトス篇は知識そのものの成立の可否を問うている．この点でやはり，テアイテトス篇は中期に分類されるという特徴を持っている．しかしなお，テアイテトス篇を詳細に分析していくと，テアイテトス篇の知識に関する討論は知的相対主義に対する反駁であり，この線で，道徳的相対主義に対する立場の表明として見なすことができる．ここで問われていることは知恵としての知識であり，初期対話編におけるソクラテスの特徴はこの形でテアイテトス篇に共有されていると考えることができる．

8) 前掲書，『プラトン全集』437頁

9) ここは印形が先天的だと考えるとイデア説に繋がる．

10) このような鳥小屋モデルにより知識を説明する方法はエウテュデュモス篇の291Bやアリストテレスの形而上学1009b38にある．この点はプラトンのイデア説と比較した場合，大きな差異がある．イデア説では既に知識を有しているものが，有していないものに提示していくという過程が教授学習の過程として位置づけられる．これに対して，ソクラテスでは自分の知識を吟味する，そして，その際の手段として他者の知識と比較照合するという過程が学習として位置づけられることになる．

11) プロタゴラス篇でソクラテスは知っていながら悪を行うことはないという考え方を示した(355D)．国家篇でも特にソクラテスの対話の仕方の特徴を示

す第一巻では，音楽家は聞き手を自らの音楽的才能を持って非音楽的にすると考えるのはおかしなことだとして，公正さについてよく理解している人が不公正な行いをすることはおかしなことだと主張する (335C-D)．このような反駁の過程から，道徳の教師はいないこと，道徳は自己吟味の過程であるという主張が紡ぎ出されていく．

12) これらは科学哲学の分野でラカトシュが言っている方法論と共通する部分がある Lakatos, I., *Proof and Refutation* (Cambridge U.P., 1976).

13) このソクラテスの一つ目の限界は初期対話篇にしばしば現れている．アルキビアデス 1 篇に示されるように，アルキビアデスに対して自己吟味を迫るソクラテスはこの姿をよく現している．また二つ目の限界はゴルギアデス篇やプロタゴラス篇に見られる．さらに第三の点はテアイテトス篇の最後でソクラテスが語る言葉,「君は君の知らないものを知っていると思ったりしないだけの思慮深さを持つ (210C)」という締めくくりや,「そして，もし君がお腹に持つようにしようと試みることがあって，もしそれを持つようになるとしたら，この吟味のおかげでもっと善いものをもって満たされるようになっていく (210B-C)」に示されている．

付　　記

プラトンの著作の引用は，岩波書店刊『プラトン全集』を参考に *Loeb Classical Library* によった．また引用，参照の末尾の内の数字はステファヌス版全集 (H. Stephanus, *Platonis Opera Quae Extant Omnia*, 1578) のページ数と各ページの段落づけに対応している．